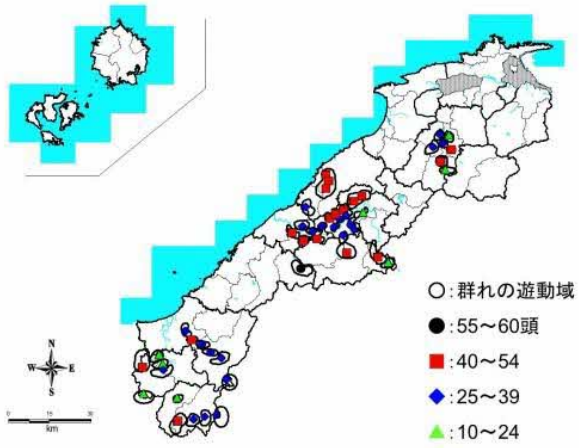
ニホンザル

ニホンザルは学習能力と運動能力の高い動物です。サルだから被害対策は難しいとあきらめるのではなく、集落の環境改善や追い払いによって、人とサルとの緊張関係を構築していくことが重要です。





49群れ、1730頭が生息する（2007年）。

◇ニホンザルの生態



群れには、いわゆる「ボスザル」はいません。メスは生まれた群れで一生過ごしますが、オスはハナレザルや他の群れに出入りしたり、オスグループを形成します。

生活環境	落葉広葉樹、常緑広葉樹といった木の実がなる森を中心に生息。スギ、ヒノキ林も休憩地や泊まり場として利用している。
食性	果実、種子、若葉、花、キノコ、新芽など植物性に偏った雑食性。昆虫も好んで食べる。地域や季節によって食物は変わる。
運動能力	数ミリのへこみや突起があれば、壁を上ることが可能。
学習能力	「記憶力」に優れる。美味しい餌にありついた場所はすぐに覚えるが、他のサルのまねをしたり、サル同志が協力して作業をすることはできません。
耳や目などの感覚	ほぼ人並み。餌は臭いではなく、目で確認して食べる。
行動範囲	群れは独自の行動域を持っています。県内の群れの行動域は、10～25k㎡程度です。

◇主な被害作物

春　期	ニンジン、ダイコン、タマネギ、ジャガイモ、シイタケ
夏　期	キュウリ、ナス、トマト、スイカ、カボチャ、トウモロコシ
秋　期	イネ、ダイズ、ダイコン、カキ、クリ、シイタケ


タマネギの被害


ジャガイモの被害


トウモロコシの被害

◇なぜ被害が起こるのか？

①これまでの被害対策の方法が間違っていた

これまでは、被害対策のための有害捕獲が多くの市町で熱心に実施されていました。しかし、捕獲のみの対策だと被害軽減への効果は低く、また農地からの単発的な追い払いだと一時的に逃げるだけで効果が出にくいとされています。そのため、集落ぐるみでの徹底した追い払いが必要です。

②捕獲に頼って他の防除を怠ると、「加害ザルをつくり出しながら捕獲をする」という悪循環に陥る

③群れで行動するので、頭数を半分にしても被害は半分には減少しない

100頭の群れを捕獲によって50頭に減らしても、残った50頭が同じ地域内を動き回るので、被害は減少しません。また、むやみな捕獲によって群れが分裂すると、対応が一層難しくなることがあります。

④仲間が殺されても怖がらない。自らが怖い体験をしないと効果はない。

⑤無意識の餌付けに成功してしまっている。（人馴れ学習＋食べても怒られない餌があること）

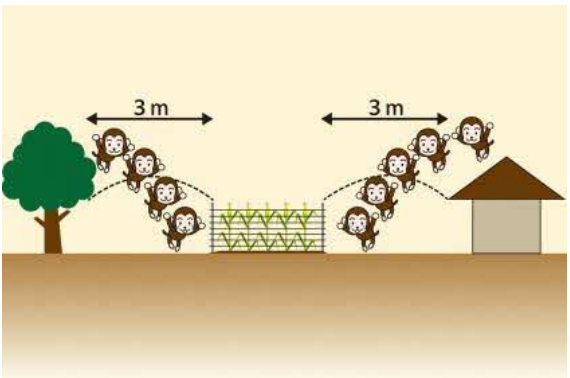
集落で怒られない餌（ひこばえ、放棄野菜など）を食べたという経験を何度もしていると、「集落は安全に餌を食べられる場所」という学習をします。また、追い払わない人がいると、「人は怖くない」という学習をします。このような怒られない餌が集落にあることと、人馴れ学習を進めることが無意識の餌付けにつながっていることを認識しましょう。

◇ニホンザルの被害対策

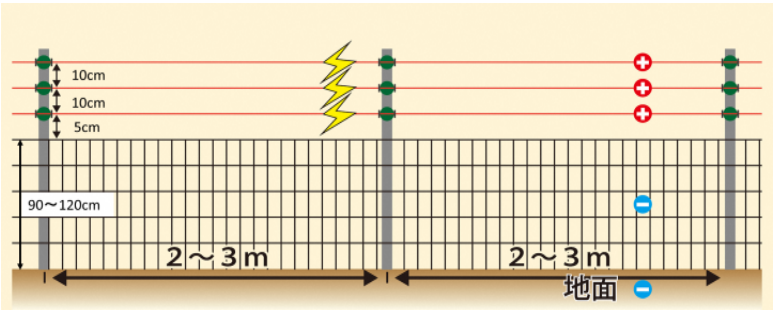




爆音機やかかしは、長期的に使うと馴れが生じて、効果が続きません。そこで、ロケット花火、電動ガン、ゴム銃などを使った追い払いによって、サルに恐怖心を与えましょう。また、集落ぐるみで追い払うと効果が高まります。



サルは屋根などから横への幅跳びによって、防護柵内に侵入します。最近の研究によると、サルの横への幅跳びの限界は220cmなので、3mの空間を空ければ侵入されることはありません。



サルは電気柵に上るので、電線はプラスとマイナスの両方を配置する必要があります。上の図では、下部のワイヤーメッシュ柵をマイナスにしています。

MOUNTAINOUS REGION RESEARCH CENTER
島根県 中山間地域研究センター

〒690-3405　島根県飯石郡飯南町上来島1207

担当科：鳥獣対策科

問い合わせ先：0854-76-2025（代表）

E-mail：chusankan@pref.shimane.lg.jp